

素の建築

都市を絡み取るヴォイド

指導教員 吉松秀樹 教授 印

8AEB3239 増田 裕樹

1. 背景・問題意識「研ぎ澄まされた建築」

身を削ぎ落とされても尚空間を残す外郭の強さと、外部と連続する透明性を合わせもつ廃墟に、無駄を削いだ建築の骨太さを感じ、「素」という感覚を抱いた (Fig. 1)。

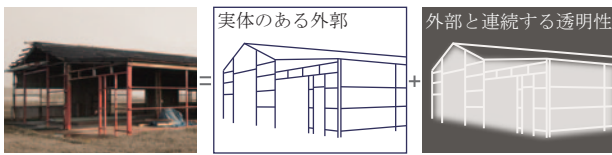


Fig. 1 透明性と不透明性の同居する廃墟

2. 分析「素と感ずる要素」

2_1. 質量を持った空虚の想像

素と感ずる建築は、空虚部分に質量を想像する。ロジェの建築試論によれば建築空間の起源は屋根にあるとされ、壊れた廃墟も屋根が残ることで内外を切り分けるものとしての建築を保っている。空虚の質量は、この削ぎ落とされても残る部分の形と照らし合わされることで、知覚することができる (Fig. 2, 3)。

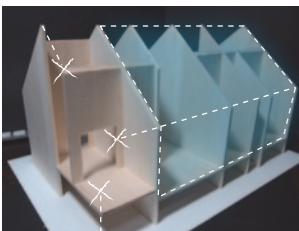


Fig. 2 壁を剥がし虚の面をつくるモデル

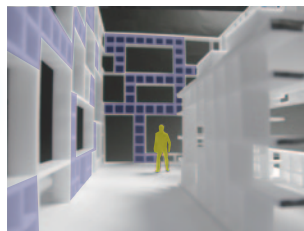


Fig. 3 外壁面に空虚を含ませるモデル

2_2. 連続の中の仕切り

廃墟建築は、外部空間が建築内部に入り込む事で内外境界が曖昧になり連続性がある (fig. 4, 5)。また欠落した壁や骨組みなどから見えない間仕切りを想像し、連続する空間の中にも曖昧な境界線が引かれている。

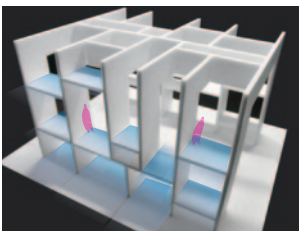


Fig. 4 厚壁により内外境界をぼかすモデル

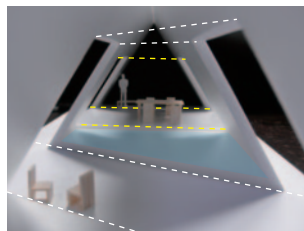


Fig. 5 連続の中の仕切り発生モデル

3. 手法「ヴォイドからの設計」

機能としての空虚を含ませる操作によって、建築の実体を減らしながら機能のある空間を増やしていく。外から内へ空間を造ることで、外部の流れを引き込みながら内部空間をつくる (Fig. 6, 7, 8)。

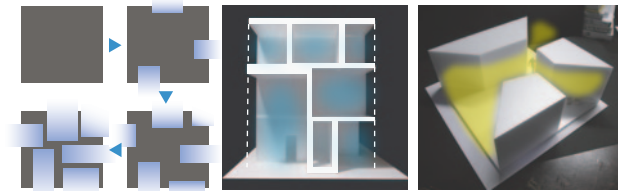


Fig. 6 空虚貫入プロセス

Fig. 7 空虚含有モデル

Fig. 8 空虚連結モデル

4. 提案「都市を絡み取る建築」

前述の手法を用いてブックカフェを設計する。ヴォイドの貫入・交差を繰り返す事によって、建築外部から内部まで一続きに連続させながらも、見えない間仕切りに囲まれた多義的領域を発生させる (Fig. 9, 10)。建築内部に都市の連続性を絡みとる事で、建築から都市へ様々なアクティビティを発信していけるのではないかと。

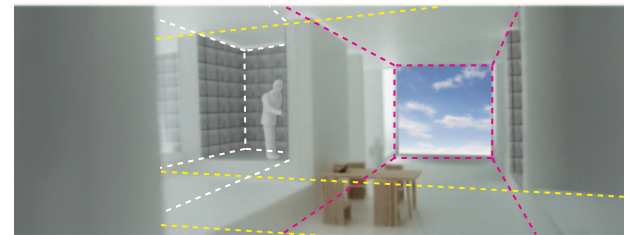


Fig. 9 ヴォイド交錯による多義領域発生モデル

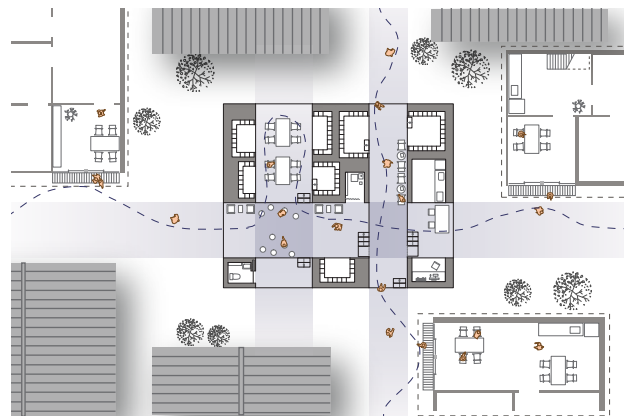


Fig. 10 周辺との連続性を建築に絡みつかせる